



現地のを“意外な使い方”でブレイクスルー。エチオピアが発祥の地である珈琲豆を使ったアクセサリーの開発は、珈琲の本と一緒に空港やホテルなどエチオピア全土で販売され、日本ではUCCコーヒー博物館などで取り扱われるようになった。女性たちが農閑期の収入源として行うか編みの技術は、小さくても付加価値の高いイヤリングの開発に応用。



まで取り組み続けること。アフリカのビジネスは短期的な利益を出すのは難しいです。相談に来てくださる企業には最初は小さなCSRのような活動を展開し、現地のマーケットや文化への理解を深めながら事業を進めることをお勧めすることもあります。すぐに利益が出なくても現地を理解し、現地の人々とビジネスパートナーとしての信頼を築き共に成長するプロセスを踏むことが近道だったりするのです。

またアフリカでのビジネスを「日本と」だけで考えないこと。輸出にしても市場を最初から日本と決めつけず、この商品はケニアやウガンダなら売れるのでは？中東やヨーロッパでは？と視点を広げることによってビジネスチャンスが見つかると思います。人材面でも日本人、現地の人と国籍にこだわらずにやる気のある人を登用しどんどん経験を積ませることが成功の鍵になると思います。

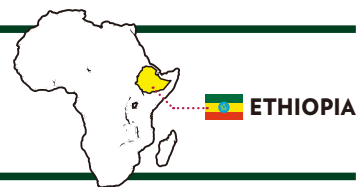
Q 日本とアフリカの文化はどのように関係していますか？

白鳥 アフリカへの関心は経済的な面では年々高まっていますが、文化などソフト面ではまだまだ遠い大陸。衣食住・アート・スポーツ・音楽・ファッションを通じて文化的なつながりを作ることはビジネスを成功させていく上でも重要だと感じています。

アフリカでのビジネスには確かに沢山の障害がありますが、インフラの未整備という面を除けば、多くの障害は先進諸国でのビジネスでも起こりうる。むしろ今の問題は文化の相互理解が足りないことだと思うのです。トラブルが起きたときに途上国だからと下に見て、相手だけに責任を押し付ける傾向は残念に思います。

ARPではアフリカの料理のレシピやカンガという布を使ったファッションの楽しみ方なども発信しています。相手の文化に敬意を払いながら、日本の価値観や美意識も伝えていく双方向からの文化理解が、ビジネスの絆を深めるのだと思います。

Q 日本とアフリカの国々が将来どんなビジネスをしていると思いますか？



ARPが出版する現地向けの本。アフリカ全体で識字率が向上しているので、先進諸国では厳しい状況にある出版産業が伸びている。CEHPが開発に携わる商品はWebやアフリカフェス・グローバルフェスでも買うことができる。



白鳥 希望としては、大企業も小さなベンチャー企業も、重層的にアフリカとのビジネスが活発に行われていてほしいですね。アフリカも色々ですが、日本も幅広く奥が深いことが伝わるといいなと思います。



しらとり?・くるみ●80年代に青年海外協力隊(ケニア)に参加し、以来、教育開発/日本語教育分野で、国際協力ワーカー、教員として働く。ケニア・スリランカ・英国・インドネシア・タンザニアなど約30年途上国で暮らし、現在はエチオピアに在住。大きな可能性を持ちながらも、課題を抱えるアフリカのために何かできたらと、非営利団体「アフリカ理解プロジェクト」を立ち上げ、代表を務める。夫(副代表)も、ケニア協力隊員OBで、エチオピアでJICA農業プロジェクトに従事している。

アフリカ理解プロジェクト <http://africa-rikai.net/>

現地のものを“意外な使い方”でブレイクスルー。 アフリカンビジネスはアフリカ理解から。——白鳥くるみさん

photograph & text by Akiko Terai

現

地の生産団体とともに手工芸品の開発支援に取り組む「エチオピアハンドメイドプロダクツ委員会 (CEHP)」。

小さい規模ながらも現地の生産者と取引企業両方に前向きな「気づき」を与える存在として活躍している。この活動を現地でコーディネートしている「アフリカ理解プロジェクト」代表の白鳥くるみさんに話を聞いた。



Q 白鳥さんのご経歴・現在の活動について教えてください

白鳥 80年代の始めに青年海外協力隊（ケニア）で活動して以来、アジアやアフリカの国々の、とくに教育開発の分野で仕事をしてきました。現在はエチオピアで「アフリカ理解プロジェクト（以下ARP）」の活動と、同プロジェクトがファシリテートする「エチオピアハンドメイドプロダクツ委員会（Commission for Ethiopian Handmade Products: CEHP）」2つの活動に従事しています。

ARPはアフリカの持つ可能性と課題をウェブやイベントを通じて発信していて、日本語版や英語版でアフリカやエチオピアを紹介する本も出版しています。CEHPでは、手工芸品をつくるHIV・AIDS陽性者の小さな女性グループから中堅のフェアトレード企業まで、9つの企業・グループとパートナーを組み、国内外の市場とリンクさせながら、新商品の開発と改善などの提案を行っています。

他に、アフリカとくにエチオピアで事業展開をしようとしている方々の相談を受けてアドバイスをさせていただくことも多くあります。

Q 白鳥さんのご経験からアフリカ、とくにエチオピアにはどのようなビジネスチャンスがあると感じられていますか？

白鳥 協力隊でケニアにいた頃から、アフリカは多様性と可能性の宝庫だと感じていました。特に昔の工芸品は、大胆な意匠ながら細部を見ると丁寧に創り込まれ、大衆アートにもユニークなものが多くあります。エチオピアでは土器や織物などはそれぞれ専門の職工集団があり、伝統技術が脈々と受け継がれてきています。またどの国のアートも象徴的で「見えないものをかたちに」というクリエイティブな能力が人々に自然に備わっているように見えます。その技術と独創性を商品開発に生かせないか、という視点を持ってCEHPの活動をしています。

例えば土器の技術ではこれまで大きな水

瓶を作っていたけれど、今はプラスチック容器があるから水瓶は必要とされない。このままでは伝統的な技術が消えてしまうし女性たちは職を失うので、その技術で小さな土産として箸置きを作ってみませんか？と提案してみる。作って見たらたくさん売れたので、今度は女性達が自分たちで考えたデザインを提案してくるといった具合です。

エチオピアはいまでも面白い時期にあると思います。アフリカで唯一植民地にされなかった国であるが故に、社会インフラが脆弱で、日本や他のアフリカ諸国のスピード感でビジネスが出来ない部分は確かにありますが、政権が安定しはじめたことで社会主義政権時代に海外に逃避した人たちが戻ってきて、新しいビジネスを始めています。観光産業が伸びていて、政府も伝統工芸品や土産物産業の育成に積極的です。

Q アフリカでのビジネスに成功する鍵はどんなことだと思いますか

白鳥 コミットメントを示し、成果が出る